

2016 年度春学期 授 業 評 価 報 告

科 目 区 分 名	医療薬学科	科 目
-----------	-------	-----

【アンケート結果について】実施対象教員 45 名中 45 名が実施し、教員実施率は 100%であった。また、実施対象 90 クラス中実施クラスは 90 クラスであり、クラス実施率も 100%であった。全学の平均クラス実施率が 94.8%であり、全学平均よりも高く、医療薬学科教員のアンケートを実施することに対する姿勢は他学部よりも協力的であったと考えられる。一方で、回答率は全学平均が 85.4%であるのに対し、医療薬学科科目では 75.0%と約 10%低い値であった。この現象は、医療薬学科では毎年続いており、アンケート用紙を配布しても何も書かないで提出する学生が約 15%、アンケート実施時に欠席して用紙を受け取っていないが約 10%存在することにある。アンケートを受け取っても答えない学生の意見を調査したところ、「何度も同じアンケートでうんざり」、「答えてもどうなるわけでもない無い質問ばかり」、「アンケートなので答えるか答えないか自由だ」という意見があった。医療薬学科科目は、文部科学省の「薬学教育モデルコアカリキュラム」に準拠しており、科目数は多いと共に全てが必須であるため時間割が過密状態であり、アンケート実施が一定期間に集中する現状が、アンケートに対して「うんざり感」を与えているのは確かである。しかし、アンケートの運用や質問の内容を考慮することなく 100%の回収率を目指すことに何の意味があるのかははなはだ疑問であり、75%の回収率でも統計学上は十分であると判断している。

【設問別集計結果について】Q4（授業外学習時間）及び Q6（授業のレベル）は全学平均より上回ったが、他の設問では低い結果となった。これらの結果の要因の一つとして毎回述べているが、薬学教育の特殊性に基づくものである。すなわち、医療薬学科科目は文部科学省の薬学教育モデル・コアカリキュラムと国家試験出題基準に準拠して組み立てられているので、講義は必然的にこれらに合わせざるを得ず、学生は興味の有無に関わらず開講されており、選択の余地が無く、全ての科目を履修して設定された課題をこなして行く必要がある。Q4（授業外学習時間）は特に CBT を受験する 4 年次生、国家試験受験を迎えた 6 年次生で突出しているが、この突出が平均学習時間を押し上げていることは事実である。しかし、各学年、満遍なく学習時間数を取れるように指導していくのが望ましい姿でもある。また、Q6（授業のレベル）は全学の中で最も高くなっているが、一定割合の学生は講義についていけないのが現状で、そのような学生の意見が Q1（授業理解度）のスコアの全学平均値よりも下回らせる結果となっている。かといって、国家試験を目標とすると、全てを成績下位者に合わせてしまうことは出来ない。さらに、Q1（授業理解度）について言及すれば、医療薬学科科目以外に看護学科科目、食物科学専攻科目、管理栄養士専攻科目においても平均より Q1 スコアが下回っていることから、授業の理解度は本学の医療系特有の現象と判断できる。Q2（意欲）、Q3（知的好奇心）及び Q5（授業の工夫）のスコアについては、好む好まざるに関わらず必要事項を学習して習得しなければならないという状況に対する感情の現れであるので、目的不明のアンケートの項目と言える。

【DWCLA10 の結果について】医療薬学科科目は、基本事項を覚え、それを応用できるようにマスターする必要があるものがほとんどなので、「分析力」と「思考力」のみが突出して高いという結果に反映されている。一方、「リーダーシップ」、「コミュニケーション力」、「自己実現力」に対するスコアは前年に比べて医療薬学科だけではなく全学的に減っており、学生の「無関心平凡主義」が浮き彫りとなっている。主に知識を学ぶ学科講義においてこれらの要素を見出すこと自体が無節操で無理があるのでコメントのしようが無いが、医療職にとって「無関心」の発想は弊害であるので、これらの素養を育むための取り組み、例えばボランティア活動の奨励などを取り入れる必要がある。

【今後の改善について】 現行のような全科目調査では、科目の内容が文科系と理科系、あるいは、臨床系と非臨床系とではカテゴリー、質、量などの面において明らかに異なるので、全学科科目平均に対する比較はまったく意味を成さず、何を見ているのかわからない。また、全教員が参加する実務実習事前学習や、実習科目、性質の全く異なる薬学研究に対して同じ質問をし、平均値をとって比較するのもナンセンスである。教員の教え方を改善させるためのアンケートだと思われるので、全調査をする必要もましてや教員自身がアンケートをとる必要も無く、教務課が対象科目を設定して少数標本をとり、しかるべき調査項目によりアンケートを履修生に対して実施し、改善が必要と判断すれば各教員に改善点を通知する仕組みに変えていくべきである。